

漢法苞徳塾資料	No. 101
区分	
タイトル	三陰三陽について 『寒温統一論』万友生（上海科学技術出版社）より
著者	八木素萌
作成日	

『寒温統一論』は書名から判るように傷寒論と温病論との理論的統合を図ろうとした書である。それだけに、総論部分には両論の要点が見事に整理され纏められている。

注「寒温統一論」よりの引用には「 」をつける事にする。

1. 太陽病

『傷寒論』の太陽編の記述の主な内容は、太陽病の表寒の虚実の証とその治に関するものである。「悪寒シ、発熱シ、頭・項・背・腰、強痛シテ脈浮ナルモノヲ主証ト為ス。」そして「無汗脈緊ノ悪キハ太陽病ノ表寒実証ニ属シ、宜シク麻黄湯ノ辛温解表ヲ用イ以ッテ峻汗セシメテ邪ヲ遂ウベシ。」「汗出デテ脈緩虚弱ノ如キハ、宜シク桂枝湯ノ辛温解肌ヲ用イテ、緩ヤカニ汗セシメテ正ヲ養ウ事ヲ以ッテスベシ。」「若シ太陽病経、ヨリ腑ニ入リテ気化ノ阻ヲ被ルヲ致シ、水蓄行ラズ小腹脹満シテ小便利セズ等ノ症ニハ、宜シク五苓散ノ通陽化氣利水ヲ用ウベシ。」「太陽病、熱内ニアリ、血蓄シテ行ラザルモノ経ニ随ウガ若クシテ、少腹硬満シ小便自利スナドノ症ノ如キハ、宜シク桃核承気湯或ハ抵挡湯ノ血ヲ攻下スルヲ用ウベシ。」基本的なシェーマを示している。

また悪喘咳を伴うことが多いのであるが、それは、太陽は陽気を中心であり、また、それは衛氣に他ならないが、衛氣は皮毛腠理の分に作用している元氣であるから、同時に肺の主る所でもあるので、太陽病には肺の病症が現われる。その一つが咳である。此の様な状態を「肺氣宣降不利」（肺の肅降作用の不利）による咳と捉える。咳には「麻黄湯」に適應する「表寒実証」の咳や、「桂枝加朴杏湯」が適應する「表寒虚証」の咳、また、「小青竜湯」が良く効く「表寒裏飲証」の咳、「麻杏甘石湯」の良く効く「表寒裏熱証」の咳、等などがある。

此れらは全て、太陽病は邪が太陽にある病氣であるからであり、太陽は衛氣を肌表に送り敷き広げる事を主さどっており、肺は氣を主り衛に属し外には皮毛に合している、と言うことの為である。

『傷寒論』には「太陽病発熱而渴 不惡寒者為温病」（太陽病発熱して渴き惡寒せざるは温病と為す）と温病の定義が記述されているが、温病の変化や伝変そして治方に関する記述は無い、これは『傷寒論』が「寒」を詳しく論述するが「温」を省略している書だからである。

太陽病は「実証」の時は、多くは「陽明」に病を伝えるし、「虚証」の時には多くは「少陽」に伝変すると言う法則的な傾向がある。

「寒」性は、

- a. 陰性であり、
- b. 凝滯性があり、
- c. 収引性・収斂性、

があるので、

- (a)寒邪に侵されると、陽気の働きが阻げられて陽気の温煦（息を吹き掛けて温める様な作用）の働きが不足する。従って一連の臓腑機能の低下衰退が出現する。

「寒邪」が肌表を侵して衛陽が鬱結するので「陽」は反応して「熱」が出たり、無汗・悪寒・体痛・等の外証を現わし、寒邪がイキナリ裏に入ると顔色は寒々と白くなり・寒がって暖を欲し・口は唾が多く淡白な感じで・口や咽喉が渇く様な事は無いが、熱いものを飲みたがる・体には熱が出ないか出ても僅かなものであり・手足は冷えて冷えのぼせる・腹は張って腹痛したりゴロゴロと腸が鳴ったりし・大便はベタベタの軟便になったり消化不良をおこし・小便は冷やっとした冷たい感じで勢いは弱くなり排尿時間は長くなる、等々の症候を呈するようになる。

それ故に「諸病水液 澄澈清冷 皆屬於寒」（諸病の水液に澄澈清冷なるものは皆寒に属す：注『素問』至真要大論第74：病機十九条の一つ）と認識されるのである。一般には是れは陰寒内盛と言い、それは臓腑の陽気が衰弱した病人に多く出現しやすい裏寒証であり、臨床的には脾・腎二臓の裏寒証が多く見られる。

- (b)人の気血津液は全て陽気の資生氣化の力に頼って、また、陽気の温煦鼓動の力を借りて、且つそれに助けられて経脈の中を通って体中を周ねく行き渡って（内にも外にも）養いを為している。寒は陰邪で収斂性、凝滯性であるから、陽気の伸び伸びと広達する事を阻害するその結果、気の停滞による血瘀や、津液の行きの滞りやが、経脈を閉阻させたりする、この為に各種の腫痛や痺痛の症候を発生させる。寒邪が経脈を犯せば経脈の気血が痺阻されるので、常に痛みの部位が固定された「寒痺」と言われる関節性疼痛が引き起こされる。寒邪が胃や腸を犯すと、気は凝り血は滞り、陽気は衝和に温煦する作用を失うので、腹部は脹満し・腸は鳴って下痢気味になり・時にはシクシクと痛む、と言う「中焦の寒証」が出現する。

寒邪が胸部を犯すと、陽痺の為に飲を化す事が出来なくなる（胸部の陽性機能の低下の為に飲食の水分が正常に吸収されて生理的な液性成分として生理的に適切な機能を発揮する事が不能になる）ので、寒飲（正常な生理的水分となれないで滞っている水；胃が冷たく水が胃でポチャポチャする）が胸脇に踞く様に停滞して、または、「宗氣不行血為之滯」（宗氣行ラズ血之レガ為ニ滯ル）となるので、「心血瘀阻」が起って脈絡は伸びやかに機能出来なくなる。この結果、「胸痺」となる事となる、それで、胸背脇肋の疼痛・浅く短い呼吸（氣短）・咳嗽し平臥困難になる、等の症状が出現するに到る。これらは、正に寒性を凝滯性として把えるべき事、寒邪はヒトの気機を阻害して疼痛症状を引き起こすと言う点では、他の外邪よりも高い比率である事を、認識させるものである。

(c)「寒」の収引性は、凝滯性と相互に関連しあい、相互に影響しあって行くものである。寒邪が身体に侵襲すると、身体の気機は凝滯するので「寒くて凝縮してしまう」と言う様に収引性の現象を現わす。身体は収縮、牽引（筋がヒキツレる）と言った表現の反応を呈する。冷たい水中で泳いだり寒冷の環境に入ると、往々にして「抽筋」（コムラガエリ、筋肉のヒキツレ）したり、寒い時には首をすくめ身をすくめる、これ等はつまり「寒則気収」の表現である。寒邪のこのような収引性は、寒邪が肌表を犯せば衛陽の働きが阻遏して毛竅が収縮する、そして悪寒・無汗・トリ肌・身体の戦慄から骨節疼痛（フシブシガイタイ、と訴えてくる）、などの症状を、また、経脈や関節を寒邪が襲えば経脈は収引し拘急して痛み、関節の屈伸が困難を覚えると言う症状を、また、肝脈を襲うと小腹（下腹部）の拘急や痙攣、疝気や冷痛、等の症状を、容易に発生させるのである。

2. 陽明病

『傷寒論』の陽明病篇の記述は、主に陽明病の裏熱の虚実についての、病証と治療に関するものである。

陽明病は「陽明之為病 胃家実是也」（陽明ノ病タル 胃家実是レナリ）、「身熱汗自出 不惡寒反惡熱也」（身熱シ 汗自カラ出デ 惡寒セズシテ反ツテ惡熱スルナリ）、「陽明脈大」などは基本的な規定であるとされている。「裏」とは、この場合は胃と腸つまり陽明の腑を意味している。

陽明病は「裏熱」が体表を蒸熱するので、高熱を発し、大汗が出、大いに煩渴し、脈は大である。

脈大きく然も充実して有力（洪脈）であれば、「白虎湯」を用いて「清熱救津」（熱ヲ清マシ 津（液）ヲ救ク）すべきである。

脈大きくも空虚で力が無い（芤脈）場合には、「白虎加人参湯」を用いて「清熱生津益氣」（熱ヲ清マシ津（液）ヲ生ジ氣ヲ益ス）すべきである。

陽明の経脈は鼻の交鞍中（鼻梁の鞍部）より起って、上に額角に行き、目を絡い鼻を挟んで顔面に布がる、この為額から眉の中を経て眼窩に連なる脹痛や、顔面が赤くなり、鼻が乾燥する等の症状が、陽明病の多くの場合に見られるものである。

裏熱が内で結滞している為に、潮熱し・腹が脹満して痛み・腹の按摩などには耐えられなくて拒絶し・便秘し・脈実、などの症状を呈するものには、「大承氣湯」を用いて、急いで下して、陰を保存してやるべきである。

若し陽明の熱が極まれば「陽盛格陰」を起こして、手足が厥冷して脈は滑となるか、伏脈となるか、このような「熱厥証」を表わす場合には、証に随って宜しく「白虎湯」、或は「承氣湯」を用いて、下して其の実熱を清ますべきである。

陽明の裏熱が下腹（腸）に迫って熱痢が止まらないと言う症状の時には、「葛根黄芩黄连湯」を用いて熱を清まし痢を解消してやらねばならない。

若し陽明の腑熱が久しく続くと、太陰の脾の液を灼り傷める「脾約証」となる、この場合には

「麻子仁丸」を用いて潤下すべきである。

『陽明病篇』は、傷寒の化熱が裏に入っている裏熱証の記述が主なものである、とは言え、裏寒証とその治療についても述べている。「食穀欲嘔 属陽明也 吳茱萸湯主之」（穀ヲ食シテ嘔セント欲スルハ陽明ニ属スルナリ）とあるのは其に例である。

『陽明病篇』は燥熱証と其の治療についての論述が主ではあるが、また、湿熱証と其の治療も述べている、茵陳蒿湯証とか、麻黄連翹赤小豆湯証や、梔子柏皮湯証に関する条文がある。

3. 少陽病

『傷寒論：少陽病篇』は主として少陽病の半表半裏での寒熱虚実の証と治療を述べている。其れは、往来寒熱・胸脅苦満・嘔きそうになりやすい・口が苦い・咽が乾く・目眩して・耳聾し・頭は側頭部がひき牽れる様に痛み・脈は浮または弦であるのが、主な症状である。是れは病邪が少陽の位、つまり半表半裏に入って、三焦の気機が不利となり、胆の腑の気機が伸びやかでなくなっている。其の為に起る症状である。「小柴胡湯」によって之れを和解させるのが良い。

若し、少陽の胆の腑にある裏熱が燃え盛るように激しければ、脅痛・口苦・咽の乾燥を覚える・目まいを覚える（目眩）・脈は〈弦・細・数〉である、等の症状を呈する。

少陽病は、病位が半表半裏であるから、本来発汗法も瀉下法も適切ではないとされている。ただし少陽病と太陽病の表寒が兼証であるとか、陽明病の裏熱が兼証となっているとか、こう言う場合には、「柴胡桂枝湯」の和法と汗法を兼ね備えた薬方や、和法と瀉下法を兼ねた「大柴胡湯」を用いるべきである。また、少陽病に厥陰が併合して、その為に厥陰が安寧でなくなって、煩驚し譫語する等の症状を現わすものには少陽を和解させ同時に厥陰を鎮め安定させる作用のある「柴胡加竜骨牡蠣湯」を用いるべきである。

4. 太陰病

『傷寒論：太陰病篇』の主要な論点は太陰（脾）の裏寒虚証とその治療法である。ただ寒くて暖まらず、吐いたり下痢したりするのに（水分が失われるのに）渴すること無く、食は下らず、腹満して時に痛み、脈は沈・遅・緩・弱となる等々が主な症状である。これには、「理中湯」によって温補（脾臓の陽を）驅寒せしめるべきである。太陰脾臓は「湿土」の臓とされている、脾が虚するときには内湿が生じるものであるから、太陰脾臓の虚寒証では必ず内湿の患らいをなす事となる。太陰脾臓の病の主な薬方である「理中湯」は良く「温中驅寒」する薬であるが、同時にまた、能く「健脾燥湿」（脾を健やかにし湿を燥わかす）させる作用がある。

表裏ともに虚寒証となる太陰病に太陽証を兼ねている場合で、病がやや表に偏している者には、表邪を解散させると共に中を補す事を兼ねる「桂枝湯」を用いるべきである。然し、病が裏に偏する者には、「桂枝人参湯」の「温中兼解表」（腹中を暖めるとともに表邪をも解散させる）の作用を適用するべきである。

『太陰病篇』は脾虚の証と治とを主として論じているが、脾虚胃実の証と治についても記述している。腹が膨満して実痛する場合の「桂枝加大黄湯」が主治薬である。裏寒実証の記述もある、白散（亦は三物小陷胸湯）が主治する寒実結胸などはその例である。

5. 少陰病

『傷寒論：少陰病篇』の主要な内容は、少陰（心・腎）の裏寒虚証とその治療についてである。

少陰病は、身体がただ寒くて暖まらず・ただ横に臥していたい・小便は無色透明で冷んやりとしており・脈は〈沈・微・細〉であるのが、主な症状である。これには、少陰（心・腎）の陽気を補して祛寒せしめる作用がある薬方「四逆湯」を用いるべきである。

若し、この少陰裏虚寒の証が甚だしくなって（裏の虚寒がより甚だしくなって）「陰盛格陽」の状態になると、身熱は高いのに衣服を欲しがり、顔は赤くて手足は冷え、脈は微でまさに絶えんとするかの様であり、或は浮・大で按ずれば空虚である、等の症状を呈する。これには「峻温回陽」すべきであるから「通脈四逆湯」を用いる。若し腎陽が衰微した為、ちょうど火が水を制する働きを失っている様になり、水気が上下内外に体中隈なくあふれる事になって、顔も身体も全身遍く浮腫し、小便は不利となり、動悸し眩暈（めまい）し、身体が小刻みに震える、等の症状には、「温陽化気利水」すべきであるから「真武湯」が良い。

若し少陰病の当初、反って発熱して、然も、脈が沈であるのは、太陽と少陰が二つながら「傷寒」にやられた者であって「表実裏虚証」である。これは「發表温裏」すべきで「麻黄附子細辛湯」を用いる。（若し太陽病で発熱して頭も身体も痛んで脈は反って沈ならば、急いで「四逆湯」を与えて裏を救ってやらなければならない）。

傷寒の邪が少陰に入って心と腎との陽気を損傷すると、大抵は「亡陽虚寒の脱症」になる。心火はすなわち命火の焰であり、腎陽は人身の陽気の根本である。従って、少陰の陽虚は腎を主とするので、先人は「少陰病是生死関」（少陰病ハ是レ生死ノ関）と言った。少陰の傷寒は人身の陽気の根本を揺るがすので、生命が極めて危うくなる事と関係すると考えた。

『少陰病篇』は寒化証とその治について論じるのが主となっているが、また熱化証とその治も論じている。例えば、心火は上で亢熾して腎水は下で虧損している、そのため心煩（心臓不安）して横臥することが出来なくなる等の症状には、「黄連阿膠湯」の瀉火補水を用いるのが良い。心の熱が小腸に移り（波及、影響）、或は、腎の熱が膀胱に移ると（波及、影響）、煩渴（咽喉が激しく渴く）して眠られず、小便は不利となり、甚だしい時には尿血する、これには「育陰清熱利水」（陰の力を育てその熱をさまし排尿を良くする）させる「猪苓湯」を用いるのである。

6. 厥陰病

『傷寒論：厥陰病篇』には55条の条文があるが、厥陰病を規定する明文は4条のみで、然も、処方に記載していない、また、脈や証の記述はかなり簡略されているので判かりにくい。そのうえ

残りの五十一条では厥・熱・嘔・利について総論的に記述されているので、一層判り憎い記述の仕方となっている。万友生は『太陽病篇』にある温病や風温についての記述を検討している

◇「『太陽病発熱シテ渴シ 惡寒セザル者ハ 温病ト為ス 若シ発汗已ミテ灼熱スル者ハ 風温ト名ズク 風温ノ病タル 脈陰陽俱ニ浮シ 自汗出デテ 身重ク 眠睡スルコト多ク 鼻息必ズ鼾シ 語言ハ出デ難シ 若シ下スコトヲ被ムル者ハ 小便不利シ 直視失溲ス 若シ火ヲ被ムル者ハ 微ニ黄色ヲ発シ 激シイトキハ驚癇ノ如ク時ニ痙瘓ス若シ火ニテ之ヲ薰ズレバ 一逆シテ尚ヲ日ヲ引キ再逆スレバ命期ヲ促ス』これは太陽の温病が表から裏へ入ったものであるが、主として厥陰に入ったもの」としている。「心包では鼾眠言語難出など、肝では直視しする等となる事」を示している。そこから温病論に入っていく。